
アージフ

小沢出新都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アージフ

【Nコード】
N3000U

【作者名】
小沢出新都

【あらすじ】
公開しなかった短編の在庫処分。

此処は神霊とちかしき世界。神が在り、霊が降り、怪奇が振るう。
この世界に神の領域を最新鋭の科学で探究せしものたちがいた。
その名は国家第一霊科機関アージフ。

#

「あーもう、電車が遅れて遅刻だよ。よりによって車掌が霊障にかかるなんて。」

午前10時、私はようやくアージフにたどり着いた。

アージフのオフィスは寂れた雑居ビルの2階にある。私はそこで事務員として働いてた。

「おはよう、神無子くん！最近是不況で線路に地縛霊が多いからね。だが、安心したまえ。僕たちの開発した清めの食塩。これを毎日、ご飯を作るときに使えば霊症になんてもう悩まされない。売り出せば大ヒット間違いなしだ。」

「食塩の製造販売ができるのはJ.T.だけですよ。」

よって、そんなもの開発しても無駄である。

遅刻しても怒られることは無い。緩い職場だ。

朝からハイテンションで話しかけてきた顔は良いのになんとも残念さがただよう男は、アージフの所長、杵柄だ。

「よくきたな。待ちくたびれたぞ。」

そして何故か偉そうに話すサングラスをつけたやたら渋い男がバイトの貞夫だ。

アージフを構成するのはこの3名である。たったの3名だ。

「待ってたって何かあるの？」

ぶっちゃけた話、3人だけということで、事務員の仕事もそんなくない。

神無子は二人の研究を見学したり、たまに手伝ったりするのが常だ。

「ついにあれが完成したのだ。」

貞夫がサングラスをくいつとあげ、にやりと笑う。

「そう！僕たちの１年かけた偉大なるプロジェクト！」

「それってもしかして！」

私も声を張り上げ、驚いた声を出した。とりあえずまったく思い出せないから、一緒に騒いでおこう。もしかしたら、話している内容でなんのことかわかるかもしれないし。

「付喪神の生成だ。」

貞夫よ、感謝する。

#

付喪神、ご存じですか？

長年大事につかわれた道具に魂が宿り、低級神化するものです。説明終わり。

そんなわけで、私は二人に連れられ研究室にやってきた。

「なんですか、これ？」

私は思わず呟いた。

「見てわからんか？」

そう言われて私は目の前にあるものをもう一度見た。

まずは気密性の高そうなガラスケース。分厚いガラスの直方体がある。その中には砂利や小石がたくさんしきつめられて、線香と呪符のようなものがところどころ散らばっている。それらが入ったケースを支えるのは机ほどの大きさの機械で、管が伸びガラスケースとつながっている。モーター音が研究室の中に響く。

それ自体はまあぎりぎり変哲のない装置と言えよう。スーパーマーカーに置いてあつたら驚くが、研究室にあるのは不自然ではない。

しかしそのガラスケースの中心にひとつ似つかわしくないものがある。それは…

「桜餅？」

「その通りだ。」

貞夫は鷹揚にうなずく。

「え？これ何やってるの？」

「だからさっきから付喪神の生成だといってるだろう。この装置はガラスの中を無菌状態を保ち、水と空気を一定の状態で循環させる。桜餅もあらかじめ滅菌処理が行われている。これにより桜餅を腐らせず、常にみずみずしい状態で保つことができる。下には恐山から取ってきた小石を滅菌処理したものが入っている。これによりケース内に霊的磁場を発生させている。これで1年という短期間でもこの桜餅から付喪神が生まれるはずだ。」

「なんで桜餅でやる！」

「ふっふっふ、科学とは未知の分野に挑むものさ。使い古した道具から付喪神を生むなんていうのは平安時代からやられていること。それでは何の発見も成果もない。」

「そこで生菓子でやってみたというわけだ。わかったか？」

「お前らが馬鹿だということはわかった。」

#

そしてついに装置から桜餅を取り出すことになったらしい。ついにかいったが、心底どうでもいい。本当にどうでもいい。

「さあ、世界初、桜餅の付喪神の登場だ。人類の新たな大きな第一歩だよ。」

「確実に道端の溝に足を突っ込む方向ですけどね。」

「よし、やるぞ。」

普段はスカした態度の貞夫だが、今日は少し興奮ぎみだ。ピンセットで捕まれた桜餅がむにと形を変える。

装置の性能は良かったらしい。桜餅は一年経った今でも食べられそう。食べる気はまったくないが。

桜餅が和紙の上に置かれる。和紙は台座に固定され宙に浮くようになっていく。丈夫なので桜餅が載っても破けることはない。その上にも和紙が置かれ、ちょうど和紙で桜餅がサンドされるようになる。

そして霊符を取り出した貞夫は、和紙の下の空間にそれを張り付ける。

霊気と紙転写法といって霊符の霊力を下から当て、神霊磁界を引き起こし霊現象を拡大し観察する方法だ。和紙には微量の霊気が織り込まれ、心霊現象に感応するようにできている。

「来るぞ。」

霊符が光を放ち発動する。放たれた光は和紙にあたり、感光部に文字を描き出す。霊符に与えられた形質はそこで遮られ、霊力の余波が桜餅の現世を揺さぶっていく。

そして霊符の光が収まったところ。

しーん

「何も起きないですね。」

何も起きなかった。本当に。

所長も貞夫も動かない。たぶんショックだったのだろう。

研究室に沈黙がおちる。

「では、帰りましょうか。」

私は一人そう取り仕切ると、バッグをもって帰ろうとする。だが。

「いや、まて！」

貞夫がいきなり再起動し、それを引きとめた。

「え、なに？まだ何かあるの？」

今日はスーパースーパーの特売日で、激安卵を狙っている私としてはなるべく早く帰りたいかった。

「これを見てくれ。」

そう言っただけで貞夫は、桜餅の上に置かれた和紙を指でさした。

「えつと…。」

なんか染みがついている？ようにしか見えない。桜餅の水分でもついたのだろうか。

「これは！」

しかし所長の反応は違った。

「すぐに解析しよう。」

そう言つて、所長は桜餅の上のついていた和紙を、スキャナーの中に入れる。

「あれってなんなの？」

状況が理解できないのでパソコンの前に座つた貞夫に聞いてみる。
「あれは、精霊現象かもしれん。神化するまでには至らなかった桜餅の魂が、そのまま精霊化し我々に何らかの意思を伝えようとしている可能性がある。」

そう言いながら貞夫は、スキャンされた画像をソフトに取り込み解析していく。

「やはり、精霊文字の一種だな。魂の輪廻により、表意文字が集合意識体に溶け込み再構成されたものだ。意思は希釈され薄弱だが、積算すれば何か意思をもった言葉へとなるはずだ。」

「さあ、精霊よ！僕たちに何をつたえようとしたんだい！」

貞夫がエンターを強く叩くと、画面に文字が表示される。

『ちゃんと食べてください（怒）』

ディスプレイの白いバックにそれだけ映っている。

「怨念になっちゃってるじゃない。」

私は呆れて呟いた。

#

桜餅を所長と貞夫に食べさせた後、会議することになった。

「さて、今回の研究成果で、桜餅から付喪神を生じさせるにはちゃんと食べなければいけないことがわかった。」

「いい加減桜餅から離れなさいよ。」

何故か会議をしきる貞夫に突っ込む。

「困った問題だね。桜餅を一年間食べ続けることは難しいよ。確実に途中で無くなってしまふ。」

こいつら聞いちゃいねえ。

「たくさん突っ込んでおいたらだめなんですか？」

「ダメだな。桜餅という形態は、餡子とそれを覆う生地で構成される。桜餅がたくさんあっても、それぞれでしか個は形成されない。」

「それじゃあ無理なんじゃないですか？もうあきらめましょう。」

ただでさえアホらしい企画に、スーパーの特売の時間が迫っている私は、積極的に計画をとん挫させる方向に誘導することにした。

「くっ…、不可能なのか。桜餅から神を生むために費やした僕たちの努力は無駄だったのか…。」

そんな努力無駄でいいよ、と言いたい。

「いや、諦めることはない。」

「貞夫くん！？アイディアがあるのかい。」

貞夫は不敵にサングラスを上げ笑った。

「無いなら作ればいい。」

そして私がスーパーの特売に間に合う可能性は潰えた。貞夫は死ねばいい。

#

「さて、準備は完了だね。」

10畳はあろうかという部屋に、私たちはいた。ここは完全隔離された滅菌室だ。私たちも入るに当たって、特殊な処置をうけた上、マスクと作業衣をつけている。

「借りるのに多少無理をいったが、これなら完璧だろう。」

貞夫が中を見て不敵に笑う。

「滅菌培養され加工された道明寺粉、小豆、食紅、砂糖の搬入も完

了した。」

「よし、では作業を開始しよう。」

「はい……。」

気合十分の所長たちに、私の返事はもちろんやる気ない。

「うっ、巨大プリンならともかく、巨大桜餅なんて気が進まない。」

「あまり喋るな。バイオセーフティレベル3相当の滅菌処理とはいえ、完璧じゃない。万が一コンタミネーションを起こし、腐敗が起こればいちからやり直しだぞ。」

そもそもなんで事務員の私がと思ったがやり直しはしたくないので黙る。

まず、小豆に水を加え中火で煮る。下処理は搬入前にやっておい

た。
灰汁が浮いてくるので、こまめに取って行く。一度水を捨て、つかれる位の水を入れ煮ながら小豆をつぶしていく。またしばらく煮て、頃合いが来たら砂糖を加えていく。

砂糖が溶けたら焦げないように少しずつかき混ぜながら煮詰めていく。

しばらく煮たら出来上がり。といっても、作る量が半端ではないなるべく大きな鍋を用意したが、それでも3回ぐらいは作ることになった。

次は生地だ。巨大なボールに道明寺粉をこぼぼと注ぎ込んでいく。それに食紅をばさばさと加え、少し温めた滅菌水をどぼどぼ加える。そしたらしばらく放置だ。

そのうちに大量の餡を丸める作業に入る。3人がかりで必死に形を整えていく。確実に人間よりでかい。

ボールを蒸し器に入れ蒸す。これだけの量なので、時間は感に頼るしかない。2時間ほど蒸したら、取り出して砂糖をどかっとかえる。棒を使ってみんなで混ぜる。腕がきつい……。

そして滅菌されたシートの上に広げ、ひらべったくする。

巨大なあんをその上に乗せ、包んだら完成だ。

「出来たあ…。」

「やったね！」

「完成だな。」

総作業時間6時間、目の前にそびえたつのは巨大な桜餅だった。

#

それから私たちの生活は変わった。

「よし、今日も異常無しだね。」

毎日、無菌室に出勤し、滅菌処理を受けた後、桜餅が置いてある部屋に入る。菌が繁殖してないかチェックをする。

「さあ、今日の分だ。食べたまえ。」

貞夫が渡してきた皿には切り分けられた桜餅の欠片が乗っている。

「ええっ…、また餡子の部分？」

「仕方ないよ、餡子が8割を構成してるんだから。」

ぱくつとみんなで食べる。大味だが意外とよくできていた。

そうして私たちは、毎日巨大桜餅を少しずつ食べ続けた。

雨の日も。

「うっ、びしょぬれ…。」

「よく乾かせ。カビには気をつけねばなるまい。」

嵐の日も。

「もう餡子はいやあああ。」

「仕方ないね。餅の部分をあげよう。大事に食べるんだよ。」

嵐の日も。

「休んでいい？」

「だめだ。」

そして一年の月日が流れた。

「さあ、ついにこの時が来た。我々の追い求めてきたものが、今日の前にある。」

「個人的には追い求めたく無かったですけどね。」

目の前には一年間食べ続けた桜餅がある。あれだけあった巨大桜餅も、今目の前にあるのは5センチメートルほどの欠片だ。

「さあ、実験の準備は完了だよ。霊符を発動させよう。」

そう言つて所長が、霊符に触れようとしたときだった。

ぴかーん

桜餅がひとりでに光りだした。

「何をやった、杵柄。」

「ぼ、僕はなにもしてないよ!？」

桜餅は発光して中に浮き始める。

「いったい何が起こつてるの!」

「わからん。」

「ええ!ちよつとお!。」

騒ぎ出す私たちを置いて、桜餅はぴかっ—と一際大きく光を放つ。

「きやあつ」

「うわっ」

驚いて目をつぶる。

やがて光が収まり、目を開けると。

「なにこれ…。」

目の前には巨大な桜餅がいた。最初に作ったときと同じ大きさ。

でも、何かちがう。そう黒い大きな点々が二つあった。まるで目みたい。

というか、さっききよろつと動いてまばたきした。目だ。確実に目だ。

桜餅についた目は、二度ほどぱちぱち瞬きすると。少し恥ずかしそうに頬を染め、というか元からピンク色だが、私たちに話かけた。『は、はじめまして。』

#

正氣に戻った二人が、解析した結果、このピンクの巨大な桜餅は

霊体で、まさしく桜餅の付喪神だということがわかった。

『一年もの間、大切にたべてくださってありがとうございます。お陰で私、付喪神になることが出来ました。』

貴重な滅菌室なんだから、実験がすんだら帰ってくれと叩きだされた私たちは、元のアージフのオフィスで桜餅の付喪神と会話する。『皆さんには感謝してもしきれません。本当にありがとうございます。』

桜餅の付喪神は、ほにゃっと微笑んでくる。

「いいえ、それほどでも…。」

終盤、私は餡子に飽きてちよつとしか食べなかったので、何故かその無邪気な笑顔に罪悪感を感じる。

『それで、私何をしたらいいのでしょうか。』

付喪神は体を斜め30度に傾けて言った。そういえば付喪神を呼び出して何をするのかは聞いてなかった。そう思った私も所長たちに尋ねる。

「どうするんですか？これから。」

「うむ。終わりだ。」

貞夫がなぜか答える。

「は？終わり？」

「呼び出すのが目的だったからね。これで実験は終了さ。」

所長もやり遂げた爽やかな笑顔で肯定する。

「じゃあ、この付喪神の子はどうするんですか？」

付喪神も話を聞いていて、不安そうに私たちを見つめてくる。

「まったく何も考えていなかった。」

そう偉そうに言い放った貞夫を、私は思いっきり殴った。

#

「ふう、今日は間に合った。」

めずらしくオフィスに定刻通り出勤した私。

「おはよう、神無子くん。」

「所長、おはようございます。」

「よく来たな。」

「貞夫もおはよう……。」

朝の挨拶を交わす。

『おはようございます〜。』

「おはよう、さくらちゃん。」

可愛い声で話しかけられ、私は笑顔で振り向いて挨拶した。

あれから桜餅の付喪神は、さくらちゃんと名付けられ、アージフのオフィスに住むことになった。本体は滅菌ケースに入れられている。

最初は戸惑ったが、性格は良いし、姿もピンクの丸いのにいくりの目と可愛い。ちょっと大きすぎるが、そこも見慣れてくると癒される。

変な男ふたりしかいなかったころより、職場の雰囲気は比べ物にならないほど良くなった。

『神無子さん、頼まれていた書類のコピーできましたー。』

「ありがとう、さくらちゃん」

ふよふよと宙に浮かびやってきたさくらちゃんの体には書類のコピーがひっついていて。私はそれをぺりっとはがして受け取る。

付喪神として騒霊現象ぐらいは起こせるので、雑務ぐらいは朝飯前だ。仕事だつて手伝ってくれる。

私とさくらちゃんとの仲は友達といえるようになってきた。

さくらちゃんと一緒に仕事をして、さくらちゃんと一緒にTVを見て、二人で和菓子について語り合う。時には洋菓子のことで喧嘩をしたり、お茶を飲んで仲直りしたり、楽しい日々はあつという間に過ぎて行った。

そんなさくらちゃんの元気が無くなってきたのは、一ヶ月ほど経った頃だった。

『はあ……。』

窓の外を向いて溜息をはくさくらちゃんの姿を発見する。

「どうしたの、さくらちゃん？」

「いえ、なんでもありません。」

さくらちゃんは笑顔で体を振るが、その表情は明らかに無理しているとわかった。

「無理しないで辛いことがあるなら話して！私はさくらちゃんの友達だよ？さくらちゃんが悩んでいるなら、相談にのりたいし、力だつて貸したいよ。」

「神無子さん…。」

「そうだよ。僕たちは友達さ！」

「ああ、その通りだ。」

お前らは入ってこなくていい。どっかいけ。

「みなさん…。」

素直なさくらちゃんは感動して大きな目をつるつるさせる。

「私、鳥さんたちを見ていたんです。」

「飛びたいのか？浮いてるから十分だろう。」

「お前はちよつと黙れ。」

貞夫を殴って沈黙させる。

「いえ、飛びたいとかじゃなくて。鳥さんたちはパンくずを食べていました。」

「それがどうしたの…？」

「鳥さんたちはパンくずをどんなに細かいものでも、拾って全部たべてしまいました。私、うらやましくなつたんです。ちぎられてばらばらになつても、あのパンは最後まで食べて貰えて…。そして思つたんです。私も最後まで食べて欲しいって。」

「えっ？ちよつと待って！確かに少し残ってるけど、あれを食べちゃつたらさくらちゃんは。」

「憑代を失つては、付喪神は形を保てないよ。君は消滅してしまう。」

「わかっています…。私、今でもとっても幸せです。楽しくて優し

い三人と一緒に過ごせてとても幸福です。でも…、私は食べ物なんです。食べられることが、残さず食べてもらうことが、一番の幸せなんです。」

「だめよ…。そんなこと…。」

せつかく仲良くなつたさくらちゃんと別れたくない。私は震える声で否定の言葉を紡ごうとする。

「いや、食べてやろう。」

しかしそれは強く静かな声で遮られた。

「所長!？」

「神無子くん、君はいいのかい？さくらちゃんの悲しい横顔を見て平気なのかい？確かにさくらちゃんとの別れは辛いかもしれない。それでもさくらちゃんが本当に幸せになれるのなら、それを叶えてあげるのが友達としてできることじゃないのかい？」

「俺も賛成だ。だがお前に強制はしない。自分の意志で自分で決める。」

所長と貞夫の瞳が、私を見つめる。

私の頭にこれまでの思い出が浮かんできた。さくらちゃんの窓を見ているときの切なそうな顔、時折つく溜息、そして何より自分たちを癒してくれた優しい笑顔。

「わたし…、わたしは…。」

さくらちゃんと私の瞳が合わさる。真剣な瞳が私に強い気持ちを伝えてくる。

「わたしたべます…。さくらちゃんを食べます。」

私は頷いた。友達としてそうしなければいけなかった。

そしてお別れの日はやってきた。その日がくるまで私はさくらちゃんを連れて遊びまわった。食糧持ち込み禁止をかいぐり、テーマパークで遊んだり、一緒にショッピングをしたり、時間がある限りおしゃべりをした。

3人の目の前には切り分けられた、最後の桜餅がある。
「本当にいいの？」

『はい、お願いします。』

神無子の問いかけに、さくらちゃんは頷く。

「それじゃあ頂きます。」

それぞれ、目の前のひとかけらを、口に放り込んでいく。

甘くて、もう飽きてしばらくは食べたくないとおもっていた餡子なのに、今日は何故か少ししょっぱくて美味しかった。

「美味しかったよ。ごちそうさま、さくらちゃん。」

『みなさん、本当にありがとうございます。私、神無子さんたちと出会えて本当に良かったです。』

「わたしもさくらちゃんと出会えて楽しかったよ。」

さくらちゃんの体がだんだんと薄くなっていく。

『みなさん、さよならです。』

涙で景色が滲んでいき、ぼやけて見えなくなる。それでもわかる。さくらちゃんが最後に幸せそうにわらったのが。

#

「そうしてさくらちゃんは天国に旅だっていきました。」

霊文化科学省の予算会議、プレゼンテーション役を務めた私はえつぐえつぐと思いだし泣きしながら報告を終えた。

「きつと天国でも幸せに暮らしているよ。」

「ああ、お前は良くやった。」

そんな私を、所長と貞夫が慰める。そんな所長の目も少し潤み、貞夫のサングラスからも水滴がこぼれてきている。

空を見上げると、いつだってさくらちゃんの幸せそうな笑顔が浮かんでくる。

そして国家第一霊科機関アイジフの次期予算は0に減らされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3000u/>

アージフ

2011年6月23日21時25分発行